

次の文章を要約し、次に要約をふまえてあなたの意見を書きなさい。要約と意見はそれぞれ400字以内にまとめなさい。

当分の間、AI（人工知能）に人類の頭脳が敗れることはないだろうと言われた囲碁で、世界トップクラスの棋士が1勝4敗で負け越した。このニュースを聞いて、AIが人類を敵に回すSF映画を思い出した方も多いのではないか。「2001年宇宙の旅」や「マトリックス」、最近では「トランセンデンス」。今回のAIの「快拳」は、そんな悪夢の始まりなのだろうか。今月はこのあたりから考えてみよう。

機械に対する根源的な不安・不信が広がることは過去にも何度か起きている。古くは産業革命期のラッドライト運動^{註1}が有名であるが、1930年代、また60年代にも機械と人間の競争についての議論が盛り上がったことが知られている。最近でも、宇宙物理学者のホーキングが、真に知的なAIが完成することは、人類の終焉^{しゆうえん}を意味するだろうと警告したことが話題になった。今はAIへの脅威論が広がる「ネオ・ラッドライトの季節」なのかもしれない。

しかし、今回のAIの「快拳」は、長年の人工知能研究の流れの延長線上にあるものだ。それだけでコンピューターが意志を持つなどということはありません。重要なのは、AIには身体がないという点であろう。生命は身体という限界性があるがゆえに、自我を持つことに「意義」がある。この点でのAIと生命の隔たりは大きい。

それでは、私たちが素朴に抱く、AIを含めた社会のIT化に対する不安感^{註2}は、単に杞憂^{きゆう}だろうか。問題の本質は、技術を支配するのは誰か^{だれ}という点だ。いかなる技術も結局は人間のためにあるのだが、技術が社会のなかで適切に機能するかどうかは、制度設計に大きく依存する。とりわけITは社会制度との関係が深い。技術の進展を見越して適切に制度が改定されなければ、社会的な価値が損なわれる場合もあるだろう。たとえば、わずかなポイントが貯まることと引き換えに、私たちは購入履歴を日々企業に渡している。そのビッグデータから、企業はAIによって自社に有益な情報を掘り当てて使う。そのことの社会的な倫理性を私たちは、どう考えるべきか。また米国政府は、AIを使ってテロリストの行動の特徴を認識するシステムを作り、空港に導入しようとしている。その倫理的な妥当性は、誰がどう担保すべきなのだろうか。

このように考えていくと、SF的な視点も時には有効だろうが、真の問題を隠蔽^{いんぺい}してしまう可能性も否定できない。人間への脅威は、当面はやはり機械ではなく、人間だ。技術と制度をバランスよく目配りしながら、総合的に判断できる人間の知性こそが今、求められているのである。

注1 ラッドライト運動 英国で産業革命期の1810年代に繊維工業を中心に起こった、失業を恐れる職人や労働者による機械破壊運動。

注2 杞憂^{きゆう} 必要のないことまで心配すること。